

# 科学と詩学が会うところ

——マリルー・アウイアクタと原子のナラティヴ

松永 京子

## 一 はじめに

二〇〇三年春、ちょうどアメリカによるイラク侵攻がはじまつたときのことである。ネブラスカ州からオクラホマ州に向かって車でハイウェイを走っているとき、イラクで起こっている戦争についてラジオで聞きながら、私は東の空に大きな赤い月を見た。そして不吉だと思った。ラジオで聞いた〈戦争〉と東の空の〈赤い月〉は、無意識のうちに私のなかで結びつけられ、月は血の赤に染まり、ハイウェイに浮かんでいた。

ある事象を解釈したり意味付けたりするとき、私たちは知らず知らずのうちにこれまでの経験や記憶、あるいは自分が置かれた状況や立場を反映してしまう。そしてこのことは、私たちが原子について語るときも例外ではない。おそらく原爆を身近に感じて暮らしてきた多くの人々と同様に、私にとつての原子は、広島や長崎に投下された〈原子爆弾〉であり、『はだしのゲン』に描かれた〈ピカドン〉であり、丸木夫妻が《原爆の図》のなかで表現

した破壊的でダークな〈地獄絵図〉でもあった。私が原子について語るとき、私の原子のイメージ、すなわちこれまでの私の経験や記憶、さらには現在の私の状況やあり方を反映した原子のイメージを、完全に払拭してしまうことは難しい。そしてこのことを強く感じたのは、赤い月に遭遇した翌日のことだった。

オクラホマ州タルサに到着してから二日目、私はギルクリース美術館を訪れた。クリーク族の登録部族員であるトーマス・ギルクリースによつて設立されたギルクリース美術館には、アメリカ西部を描いた絵画や北米先住民のアート作品が数多く所蔵されている。そこで私は、一つの作品に出会った。チェロキー族のアーティスト、ウィラード・ストーン (Willard Stone) による「私たちのアトミック・ベイビー」(“Our Atomic Baby”, 1946) という題名の彫刻である<sup>①</sup>。高さ約六〇センチ。表面は丸みを帯びてなめらかで、色は濃い赤褐色。細長い像の上部には、トウモロコシの皮で包まれた人間の形が彫り込まれ、中央部分には〈キノコ雲〉を思わせる小さな円形、下方部分には赤ん坊にみえる丸い形が連なっている。ウィラードによるこの作品は、広島と長崎に原子爆弾が投下されてから一年後、一九四六年に制作された。

原子を常に原子爆弾や戦争といった破壊的なイメージに結びつけてきた私にとつて、ストーンの彫刻に刻まれた原子のイメージは新鮮だった。ストーンは、科学者たちが生み出した原子爆弾を、生命の象徴としての〈ベイビー〉、さらにはチェロキー族の生活や口承伝統で重要な役割を担う〈トウモロコシ〉へと結びつけた。原子爆弾と赤ん坊。キノコ雲とトウモロコシ。一見すると異質なこれらの組み合わせは、しばしば見過ごされてきた原子の姿を私



ウイラード・ストーン「私たちのアトミック・ベイビー」

(1946) ギルクリース美術館所蔵

たちに開示する。それは、可能性を秘めた種子としての粒子、あるいは再生を繰り返してきた生命そのものとしての原子の姿であった。

十九世紀以降、原子は人間によって理論化され、隔離され、分離され、制御されてきた。ストーンは、このように人間の手によってコントロールされてきた原子のイメージを打ち壊す。そして、隔離や分離による破壊力よりも、創造力あるいは生命力を強調すること、冷戦期の〈アトミック・エイジ〉における原子表象に新たな側面を付与した。だがこういった試みをおこなってきたのは、ストーンだけではない。テネシー州ノックススウィルに七世代目アパラチア地方人として生まれ、オークリッジで幼少期を過ごし、ストーンと同じくチェロキー族の血を引いた詩人マリルー・

アウイアクタ (Marlow Awakta) もまた、隔離、分離、破壊といった言葉に結びつけられてきた原子のイメージに疑問を呈してきた。アウイアクタは、直線的かつ破壊的な現代科学のナラティヴを批判する一方で、詩的で、生命を養う力を持つ原子の姿を、詩や散文のなかで肯定的に描いたのである。本稿では、原子を分離、隔離、制御してきた現代科学のあり方が、進歩、生体解剖、トリアージ<sup>②</sup>といった概念を広めた啓蒙時代の科学のナラティヴを継承していることを確認しつつ、このような原子観に対するオルタナティヴとしてアウイアクタが示した原子の詩学とナラティヴの可能性について検証してみたい。

## 二 アウイアクタと原子の居留地<sup>リザベシモ</sup>

一九四五年、テネシー州ノックススウィルに生まれたアウイアクタは、九歳のときマンハッタン計画の一環として建設された新興の町オークリッジへ移り住み、幼少期を過ごした。現在オークリッジ国立研究所は、医療用アイソトープの生産や人体・環境への放射線の影響の研究で知られているが、一九四三年、マンハッタン計画の一環として建設された当時は、核兵器に使用するためのウランやプルトニウムの分離精製を目的に、X-10、Y-12、K-2といったコード名を持つ施設が置かれていた<sup>③</sup>。このときアウイアクタの父親が働いていたのが、電磁気的分離を行っていたY-12である。(「原子を分裂させる」ために作られたオークリッジで過ごした経験は、後にアウイアクタが「原子は私の幼少時代の友人だった」<sup>④</sup>と回想しているように、作家の自己形成や原子観に大

きな影響を与えることとなった。

一九七八年に出版した詩集『永遠なるアパラチア山脈―山と原子が出会うところ』(Abiding Appalachia: Where Mountain and Atom Meet, 1978)のなかでアウイアクタは、オークリッジという場所に、物理的かつ象徴的にフェンスで隔離された原子が、アパラチアの山に(出会う)ことの意味を次のように述べている。

ある人たちにとつて、山と原子が出会うところはテネシー州のオークリッジのような場所―突然作られ、フェンスで囲まれ、オークや松の尾根で見えなくなつた原子炉で秘密裏に原子を分離する場所。けれど私にとつて、山と原子が出会うところは、時間と空間を超えた魂。山や原子、あるいは私たちの―時を経てこれらの山々を故郷と呼ぶようになったチェロキー族や開拓者やその他の住人の―心のなかにとどまる魂である。<sup>5)</sup>

一九四三年以降、エネルギー省、契約会社、科学者の三位一体によつてフェンスで囲まれ、原子を「分離して(：split)」「きたたオークリッジは、チェロキー族や開拓者、あるいはもともとこの土地に居住してきた人々にとつて「魂(：spirit)」であるとアウウアクタは述べる。もちろんここでは、分離するという意味を持つ「split」と、魂という意味を持つ「spirit」が対比されているわけだが、この発音のよく似た二つの言葉の違いは、この場所に居住してきた人々と一九四三年以降にこの場所に来てきた人々の、オークリッジに対する感じ方や考え方の違いを実によく捉えたもの

だったといえる。一九九三年に出版された散文集『セイルー・コーン・マザーの知恵を求めて』(Sew: Seeking the Corn-Mother's Wisdom, 1993)のなかで、アウイアクタはオークリッジを以下のように表現している。

多くの人はオークリッジを外部からみて、危険で超現代的な場所、山脈の青みがかつた霞の大波に浮かぶスペース・コロニーのように、遠くて異質な場所とみなした。私たちにとつて、そこはホームだった。<sup>6)</sup>

オークリッジは「ホーム」であるとアウイアクタが指摘しているように、先に述べた「魂(：spirit)」が、おそらくは(精神的な故郷)のようなものであると想像することは難しくない。原子爆弾に必要な高濃縮ウラン抽出を目的として人工的に作られたオークリッジという町が、この場所に居住する人々にとつての「ホーム」故郷であるというアイロニーもさることながら、「外部」からオークリッジをみたとき、そこが「危険で超現実的な場所」と表現されていることは示唆的である。「外部」からやってきた者たちにとつて、オークリッジは原子同様、他から隔離・分離されるべき場所、すなわち人間の手によつてコントロールされるべき場所として存在してきたのだ。

ここでもう一つ注目したいのは、オークリッジが「スペース・コロニー」すなわち「宇宙の植民地」と表現されている点である。『セイルー』のなかでアウイアクタが「私は一九四〇年代、政府の居留地<sup>リザベーション</sup>で育つた。インディアン<sup>リザベーション</sup>の居留地ではなく、原子の

居留地<sup>リゾベシヨ</sup>で」<sup>(7)</sup>と幾分皮肉をこめて述べているように、オーククリッジにおける抑圧の歴史のアナロジューは、詩人アウイアクタにとって明白なものだつたいえる。例えば、詩編「起源（"Genesis"）」のなかでアウイアクタは、一九四〇年代以降、核施設建設のために土地を奪われたアパラチアの住民の姿を、西部のインディアン居留地へ強制移住させられ、離散を余儀なくされてきた北米先住民の姿に重ねている。

開拓者たちは種子をまいた

それから 彼らの息子たちが鋤<sup>モチ</sup>を手にし 今度は彼らが年  
老いていった

そして山々は 霧に包まれたまま そこにとどまった  
けれども その奥深いところでは 光の胎動が始まり 乳  
汁分泌が始まつていて…

そして一九四二年 秋の葉の残り火が 冬に向かつて消え  
始めたとき  
ブラック・オークリッジの近くで新たな土地が掘り返  
された

もともとそこに住んでいた人々は 耳をそばだて

昔の開拓者の子孫である彼らは

風のおいを嗅<sup>か</sup>こうと頭をもちあげ

フロンティアが生まれようとしていた

たくさんの人が荷造りをして 家庭を離れなければならな  
かった

けれども ブラック・オークリッジに流れてゆくエネルギー

ーに 身を委ねるものもいた

巨大な磁気力に引かれるようにして

何千もの人々が流れ込んできた

ブルドーザーが大地をえぐり 振動させた

ベアクリークなどの谷間には 工場がそびえ立ち

木々の隙間には 家々の群れが立ち並らび

それは尾根の風下にまで広がっていった

まもなく丘に隠れて 巨大な街ができた

どうしてそのようなものができたのか 誰も知らな  
かった

けれどもそのエネルギーは 力強く絶え間ないブー  
ンという音を立てながら

新しい振動と 常に変動するリズムとなつて 至ると  
ころを満たしていた

それは私たちの住む ノックスヴィルの空気を満たした  
そして私は 両親が頭をもちあげるのをみた

私も頭をもちあげた というのも 私は七歳でしかなか  
つたけれど

何かによつて血が騒ぐのを感じたからだ

その何かは 長い間フロンティアへと家族を引き寄せたも  
の

ヴァージニアからウエスト・ヴァージニアへさらにはケン  
タッキーやテネシーへ

そしていま 数マイル先に 新たなフロンティアがつくら  
れた

パパが一番乗り 一九四三年 明け方家をでて 夕暮れ時に帰ってきた

仕事についての唯一の言葉は

「ベアクリーク渓谷のY・12だよ」

謎は深まった

ブーンという音は強まった

私もそこに行くことを待ち望んだ

オークリッジはマジックのような響きがあった

彼らは言った ブルドーザーは目の前で丘を取り崩すことができるのだと

家々は

アルファベット記号でサイズ分けされ プリカッタ

トされ ブロック形に箱詰めされた ブルドーザーでいっ

ぺんに何百もつくることができるよう

そして彼らは 板で歩道をつくり 土で（雨が降ったら泥で）

通りをつくり

そのまわり全部を金網で囲った 秘密を守っておくために<sup>⑥</sup>

この詩のなかでアウイアクタが浮き彫りにしたのは、アメリカにおける新たなフロンティア、すなわち（アトミック・フロンティア）へと化していったオークリッジである。核施設が建設されるプロセスのなかでオークリッジでは、チェロキー族、アラチア地方人、そして開拓時代からの居住者たちが、荷物をまとめてこの場所を去るか、この場所に残って自分たちも開発に参加するかの二者択一を迫られた。実際のところ、この場所には、スカボロ

ー、ニューホープ、ロバーツビル、エルザ、ウィートといったコミュニティがオークリッジ建設以前にも存在していたが、一九四二年、アメリカ政府が公的収用宣言を下すと、アメリカ陸軍工兵司令部が五万九千エイカーの農地を買い上げ、この土地にもともと住んでいた約三千人の住人は移住を余儀なくされることとなる<sup>⑦</sup>。アウイアクタはこのようなアラチアンの抑圧の歴史をさらに、十九世紀前半、フロンティアに沿って「ヴァージニアからウエスト・ヴァージニアへ さらににはケンタッキーやテネシーへ」と移住を強いられてきたチェロキー族の抑圧の歴史へと敷衍したのであった。

「起源」には、チェロキー族の抑圧の歴史とアラチアンの抑圧の歴史という二つの異なった植民地支配の歴史を接続しつつ、原子もまた抑圧の対象とされてきた事実も織り込まれている。大量生産できるよう「アルファベット記号でサイズ分けされ プリカッタされ ブロック形に箱詰めされ」オークリッジに持ち込まれた家々のように、外から持ち込まれ、囲い込まれた原子もまた、国家の安全や進歩の名の下に、秘密裏に隔離され、分離されてきた。オークリッジの支配と原子の支配のアナロジーについては、以下のアウイアクタの言葉にも明らかである。

この隔離された緑の渓谷をパイオニアたちは<sup>聖</sup>ベテルと名付けた。科学者たちがここにやってきたとき、彼らは言った。

「まさにこの場所だ」と。彼らはこの場所を X・10と呼んだ。

そして山の尾根に囲まれたところに、彼らは原子を分離する黒鉛原子炉を建設したのだ。何年もの間この場所は、選

選ばれた者だけが知ることができるしつかりと守られた秘密であった。<sup>(10)</sup>

オークリッジや原子を隔離・分離する対象とし、「選ばれた者だけが知ることのできる」秘密と見なす行為は、ある意味、資格を与えられた一部の人間が、解剖用の人間の死体を人間としてではなく、物体としてみる行為に似ている。オークリッジや原子の隔離・分離が、それらを「遠くて異質な」ものと見なすことで可能となったように、生物体の身体を切り開いて観察する行為は、解剖者が対象物と精神的なつながりを断った時はじめて可能となる。例えば、離島を舞台とした人気ドラマ『Dr.コトー診療所』のなかでDr.コトーは、家族同様に親しい人の体にメスを入れて手術することができるとかという問題に直面するが、患者と強い精神的なつながりをもつときに生じる医師のこのようなジレンマは、生体解剖と客観性の関係を示しているといっても過言ではないだろう。実験の対象物の解剖、分離、隔離、選別を行うためには、対象物を自己の意識から独立して存在する外界の事物とみなすことが必要とされる。このように考えたとき、オークリッジや原子を分離・隔離してきた政府や科学者たちの行為には、対象物を外界の事物、すなわち（他者）と見なすイデオロギーが働いていたといえる。そしてこのようなイデオロギーは、啓蒙時代の近代科学によって形作られ、現代医学や科学テクノロジーの使用によって引き継がれてきた科学のマスターナラティブと呼べるものでもあった。

### 三 近代科学と（近代の暴力）——ペーコン、デカルト、ホップズ

社会学者であり人権活動家でもあるシヴ・ヴィスヴァナサン (Shiv Viswanathan) は、強制収容所、原子爆弾、そして遺伝子組み換えなどといった（近代の暴力）の起源は、フランシス・ペーコン、ルネ・デカルト、トーマス・ホップズといった啓蒙時代の科学者や思想家が広めてきた、進歩、生体解剖、トリアージといった概念にまで遡ることができると述べている<sup>(11)</sup>。自然のミステリーは人間の利益のために探求され、明らかにされるべきであるというペーコンの考えや、問題解決のためには複雑な全体をできるだけ断片化すべきとするデカルトの主張、あるいは自然は無政府状態の社会であり、機械を操作するのと同様にその秩序は統一されねばならないとしたホップズの思想は、現代の科学や医学に大きく貢献してきた。一方で、人間が介入し操作すべき存在として自然を位置づけ、生体解剖などの実験的方法によって自然の謎を解明することを擁護してきた近代科学は、科学的ヒエラルキーの形成に加担すると同時に、自然や（他者）に対する暴力と無関係ではなかった。

科学史の研究者、またはエコフェミニスト哲学者として知られるキャロリン・マーチャント (Carolyn Merchant) は『自然の死』(The Death of Nature: Women, Ecology and the Scientific Revolution, 1983) のなかで、近代科学や自然哲学の第一人者である十六世紀の哲学者フランシス・ペーコンを「自然の搾取を擁護する新しい倫理を提唱した」<sup>(12)</sup> 重要な人物であると述べている。マーチャントは、新たな科学的知識や科学的方法を擁護するペーコンのナラティブ

が、十六世紀のイギリス社会における階級制度や家父長制、そして魔術（ウィッチクラフト）に対する法廷尋問を反映していると指摘し、特にベーコンのナラティブにおける性的イメジェリーに重要性を見いだした。

「人間（“man”）の技術と手によつて」はじめて自然は「彼女の自然な状態から無理矢理押し出され、取り出され、形作られる」。このようにして「人間の知識と人間の力が一つとなるのである」。

まさにこの、大胆でセクシュアルな修辭的表現のなかに、実験所における自然の拘束、技術と知性による解剖、隠された秘密の看破といった近代の実験的方法の基本的な特徴をみることができ。それは、いまだに科学者の「まぎれもない真実（“hard facts”）」、「洞察力のある知性（“penetrating mind”）」あるいは「彼の議論の迫力（“thrust of his argument”）」といったものを賞賛するときに使われる言葉である。しとやかさという衣服を引き裂かれたことに対する自然の嘆きのなかで、「自然を」看破することに対する制約は、人間の利益のために自然を搾取し「レイプ」することを正当化する言葉の容認へと変わっていった。<sup>(13)</sup>

マーチャントは、ベーコンのナラティブやいまだ科学的言説のなかで多用される“hard”、“penetrating”、“thrust”といった「セクシュアルな修辭的表現」に注目し、これらの言葉のなかで、女性化された自然の拘束や解剖、またその「隠された秘密の看破」

が正当化されてきたことに注目している。自然と人間を二項対立的に捉え、この二つの区分に優劣をつける行為は、まさに家父長制におけるジェンダーの力学を踏襲していたともいえる。こうして「しとやかさという衣服を引き裂かれた」自然の姿は、十七世紀の科学革命後、ルイス・バーリアス・パリナスの彫刻に見られるような、自らベールを脱いで科学に服従する存在へと変わっていった。<sup>(14)</sup>

さらに十七世紀には、マラン・メルセンヌ（1608-1680）、ピエール・ガッサンディ（1592-1655）、デカルトといったフランスの思想家たちによつて、あらゆる現象を「機械」というメタファーを用いて解明しようとする機械論的哲学といった考えも広まっていた。デカルトの機械論的自然観は、自然論、生気論、アニミズム信奉を否定し、自然を内部の力ではなく、外部の力によって動く「不活発な」粒子によって成り立つ「死んだシステム」とみなす



ルイス・アーネスト・パリナス(Louis-Ernest Barrias)

「科学を前にベールを脱ぐ自然」(1899)

オルセー美術館所蔵

ことで、人間による自然の支配や操作を正当化した<sup>(15)</sup>。徹底した客観主義と冷静さを重視し、問題解決のためには複雑な全体をできるだけ断片化すべきとしたデカルトの考えは、彼の生体解剖への傾倒にも明らかだったといえる。環境文学や環境正義の研究者であるジョニ・アダムソン (Jon Adamson) は、生体解剖に関するデカルトの考えを次のようにまとめている。

デカルトは、複雑な周りのコンテクストから問題そのものを取り出し、問題解決に必要なだけ多くの部分に分割することで、問題を単純化することができると見なしていた。これは彼が生体解剖の実践で試してきた考えだった。実際彼は、生きた動物を解剖することのほうが、獨創性を欠いた書物を研究することよりも啓発的だと考えていた。従って彼は、科学的リサーチのために、より「下等な動物」に痛みを与える生体解剖を容認したのだった。<sup>(16)</sup>

デカルトが支持した生体解剖は、対象となる動物を解剖者よりも「下等な動物」として位置づける科学的ヒエラルキーを採用し、問題解決のためには生きた動物にさえ「痛みを与え」客観的に観察することをよしとすることで、科学目的のための暴力を是認したのだった。

デカルトの機械論的自然観は、イングランドの哲学者であるトーマス・ホッブズにも影響を与え、ホッブズ独自の自然観へと発展することとなる。ヴィスヴァナサンが指摘しているように、ホッブズは自然の状態を「無秩序の状態」とみなし、こうした社会

の無秩序を正すには、機械の操作に必要な規則と同様に、「市民の行いに対して一般的に受け入れられたルールを課すこと」が必要であると説いた<sup>(17)</sup>。ホッブズはさらに、「原始的なキリスト教、アリストテレスの哲学、ウィッチクラフト（魔術）、オカルト科学、そしてその他の神話詩的な想像力全て」を「非科学的で不合理な信仰や慣習」とみなし、このような「扇動的な信仰や慣習で満ちた過去」を完全に排除してしまわない限り、新しい政治的秩序や倫理的秩序は成立しないと信じていた。こういったホッブズの（「進歩」に対する考え方には、過去と未来に優先順位をつける直線の思考、すなわちトリアージの概念が反映しているとヴィスヴァナサンは指摘する。トリアージの概念を反映したホッブズの直線の思考は、ヴィスヴァナサンが特筆するように、非科学的な文明や部族文化を、近代や進歩の対極にある過去として位置づけ、同化すべき存在、あるいは消え行く（他者）としてしまうことに他ならなかった<sup>(18)</sup>。

十七、十八世紀に確立されたトリアージ、生体解剖、進歩という概念は、（他者）を抹消することをも辞さない科学的暴力を容認する危険性を孕む。そしてこのような科学的暴力が最も顕著な形で表れたのが、第二次世界大戦で施行された強制収容所や原子爆弾の投下であった。ヴィスヴァナサンは「アトミック・ホロコースト」を、トリアージ、進歩、生体解剖の概念に結びつけ、以下のように述べている。

トリアージは、生体解剖と進歩の概念を結びつける沈黙の言葉である。実験としての生体解剖には無関心という考え



が内在しており、進歩は退廃を示唆する。トリアージはこれらを合わせて、無関心なもの退廃、という考えをうみだす。「中略」西洋の他者との遭遇は、最終的な論理、すなわち抹消に終わる。トリアージは、合理的行動、すなわちアトミック・ホロコーストとして、近代のもう一つの大きな流れと合流する。<sup>(19)</sup>

「無関心なもの退廃」というトリアージの概念は、生体解剖であれ原子爆弾であれ、歴史的に科学的進歩とみなされてきた人間の行為が、いかに「他者」を「抹消」しようとする力へと結びつけられてきたのかを説明する。原爆が「生体解剖の暴力」を体現する具体的な段階としてヴィスヴァナサンは、(一)原爆投下の決断(二)被爆者への対応(三)現在も続く核研究といった三つの段階を示しているが、この三つにさらに付け加えられるのが、原子爆弾の製造過程における原子に対する暴力であろう。原子を隔離し、分離する行為は、科学実験や「進歩」のために、原子を実験対象物、すなわち「他者」とみなし、破壊する行為でもあった。

#### 四 コーン・マザー(「セイルー」)——サブバイバルのナラティヴ

アウイアクタはインタヴューのなかで「原子が一九四二年に始めてアパラチアにやってきたとき、(「スクエア」)すぎてうまくフィットしない気がしました。私の仕事は、原子を紡いで編み込むことのできる束へとかえていくことです」<sup>(20)</sup>と述べている。

これは、これまで軍事的・政治的・科学的文脈から支配的に語られてきた原子のナラティヴを、アパラチアンやチェロキーの歴史的文化的文脈から語り直そうとするアウイアクタの試みを指しているといっている。そしてアウイアクタの原子のナラティヴの語り直しの土台となっているのが、チェロキー族の口承伝統のなかで伝えられてきたコーン・マザー(「セイルー」)の教えであった。セイルーの言い伝えには様々なバージョンがあるが、そのなかでもよく知られているのが、次のバージョンである。

セイルーはお腹をこすって自分の身体からでてきたトウモロコシを二人の息子に与えて育てていた。けれども二人の息子たちは、自分たちの食べ物どこからきているのかを知ると、母親を魔女(「Witch」)と見なして殺してしまう。殺される前にセイルーは、自分が死んだらその身体を七回地面に引きずるよう、息子たちに指示していた。息子たちは母親の言いつけを守り、彼女の身体が引きずられた地面からはトウモロコシが育つようになった。<sup>(21)</sup>

コーン・マザーの物語は、人々の命をつなぐ食料としてのトウモロコシの重要性を教えてくれると同時に、死を迎えても再生し続けるトウモロコシのあり方を描いている。また、セイルーは「こん棒で殴り殺され」、「頭部を切断された」とあるように、かなり残酷な形で命を奪われるものの、二人の息子たちがセイルーの教えを守ることで、この物語は二人の兄弟の、そして究極的には部族のサブバイバルの物語へと転化していく。事実、セイルーの物語は、強制移住に

よってディアスポラ化したチエロキ族の再生の歴史のなかで、サバイバルの物語として繰り返されることとなる。東部チエロキ族と西部チエロキ族の評議会がテネシー州で最後の会合を開いた翌年、チエロキ・ネイションは分裂させられ、〈涙の道〉(Trail of Tears)として知られるミシシッピ川以西の土地への強制移住を強いられ、多くの部族民の命を失った。しかしチエロキ文化とその精神は、アウイアクタの言葉を借りれば「コケのなかに隠れて固まった状態で」生き延びた。〈涙の道〉から約一五〇年を経た一九八四年、東部チエロキ族と西部チエロキ族の評議会のメンバーは再び、テネシーで再会を果たしたのである。

この再会が果たされる一年前、アウイアクタは『ライジング・フォーンと火のミステリー』(Rising Fawn and the Fire Mystery: A Story of Heritage, Family and Courage, 1833)という児童向けの物語を出版している。この物語の主人公であるチヨクトー族のライジング・フォーンは、トウモロコシの知恵と火のミステリーを通じて、「いかに自分のヘリテッジを失うことなく生き残るか」ということを学ぶ。強制移住によって家族が離ればなれになる直前、ライジング・フォーンの祖母は彼女の手のひらにトウモロコシをのせ、次のようにライジング・フォーンに語って聞かせる。

この「トウモロコシの」中心は神聖な火の小さな炎のようなもの。でも殻がどんなに頑丈か確かめてごらん。床に投げてもいいし、小袋に入れておいてもいいし、手で持ってもいいし、それでも種は暖かい大地でしか芽吹かないんだよ。もし早く芽を出してしまうと死んでしまうからね。安

全なときがやってくるまで自分自身を守っておくーそれがトウモロコシの知恵なんだ。種はその時がやってくるまで、精神の奥深くに生きているんだよ。<sup>(22)</sup>

トウモロコシが固い殻によって自らの実を守り続けるように、ライジング・フォーンは親切な白人夫婦に引き取られた後も、自分の心の固い殻のなかに閉じこもったままにいる。家族と離ればなれになつてから一言も口をきかないライジング・フォーンは、安全になるまで、周りの状況をじつくりと観察し、芽吹くタイミングを見計らっているのである。そして彼女がはじめて言葉を発したのは、白人夫婦がライジング・フォーンと彼女のヘリテッジをようやく理解しはじめたときのことだった。このときライジング・フォーンは、祖母からもらって大事にしまっておいたトウモロコシが、自分自身であったことを理解する。

彼女「ライジング・フォーン」は、朽ち葉色のトウモロコシの穀粒をみた。その固い殻は割れ始めていた。蔓状の根が地面に向かって下へ伸びるにつれて、細長い新芽が小さなきらめきを帯びた葉っぱを広げながら上へと押し出した。彼女は理解した。彼女の魂<sup>スリット</sup>が無事だということ。また彼女も皆のために、常に種を運んでいるのだということ。けれども彼女の種は、この新しい土地で育つのだということも。<sup>(23)</sup>

こうしてライジング・フォーンは、家族の離散と強制移住という部族の悲劇を経験しながらも、目にはみえないところでその文化

とヘリテツジを守り続け、最後はトウモロコシが生命を継承していくように、自らが部族のサバイバルの継承者となっていく。トウモロコシの種に宿る生命は目に見えないため、その力を信じることを困難にはするものの、その不可視性は同時に、(外敵)から身を守るためのサバイバルのツールでもあった。

散文集『セイルー』のなかでアウイアクタは、このように部族のサバイバルと結びつけられるトウモロコシのあり方が、ポエトリーすなわち詩のあり方にも似ていることに注目している。

ポエトリーは、そのエネルギーが集中していて、目に見える部分を超えたところで現実を喚起するという意味において、トウモロコシの種に似ている。繰り返しになるが、理解は時間を要する。けれども種は現実そのもので：生きたポエムであって：それはすぐに伝えることのできるメッセージでもある。それは何を意味しているのだろうか？人間の知性は七千年も費やして熟考してきたのに、その謎についていまだ解明できていない。<sup>(24)</sup>

ここでアウイアクタは、トウモロコシと詩を、集中的なエネルギーと「目に見える部分を超えたところで現実を喚起する」という点において結びつけた。一方で、「目に見える部分を超えたところで現実を喚起する」種が「現実そのもの」でもあるという謎を、私たちがいまだ解明できていないとも主張している。このようなアウイアクタのトウモロコシと詩に対する見解は、人間の限界と可能性を示しているようにも思える。自然界の象徴でもあるトウ

モロコシは、人間の計り知れないエネルギーをもっているという点で人間の限界を超えているが、人間が生み出す詩もまた、言葉の羅列であるにもかかわらず、表面的な言葉を超えたメッセージを伝えることができるという点において、人間の潜在能力を示唆しているからだ。こういった一見矛盾したポエティックスのあり方は、移住や離散によって部族の存続がほとんど不可能に見えながらも、目に見えない形で生き延びてきたチェロキー族の文化や精神のサバイバルにも通ずるだろう。以下は、アウイアクタがサバイバルのパターンとポエティックスの関係について述べた文章である。

サバイバルのパターンは、一次空間のポエティックスにある。バランス、ハーモニー、包括性、協調性―秩序のパラメーターのなかで生まれる生命。このパターンは母なる自然の最も深い本質を繰り返し、ここでは原子が―それ自身の予想可能なパラメーターのなかで―自由に動き回って新しい生命を生み出している。変化における継続、宇宙を維持する基本的な力学。

チェロキー族はこういったポエティックスをサバイバルに利用したのだ。<sup>(25)</sup>

ここでアウイアクタは、サバイバルを「バランス、ハーモニー、包括性、協調性」といった特徴に見いだし、そのパターンを生命の継続性や「宇宙の力学」そのものであると表現する。そしてこのように、近代科学の支配的ナラティブからサバイバルのポエティックス

の文脈に置き換えられたとき、理論化され、隔離され、分離されてきた原子は、「予測可能なパラメーター（媒介原子）のなかで」「自由に動き回って新しい生命を生み出」すのだ。アウイアクタはさらに、原子の循環的な動きと再生力について次のように述べている。

原子は確かに、自然の「母の心臓」であるのだということに私は気がついた。循環的な動き、常に動いて、常に新しい形と融合しながら、生命を生み出すもの。たとえ私たちが地球や自分自身を破壊しても、原子の母の心臓、すなわち再生する自然の中心は、生命を生み出し続ける。<sup>(26)</sup>

アウイアクタのナラティヴはこのように、原子の循環的で育成的な性質に目を向けることで、自然の生命力や再生力を肯定的に捉える詩学を擁護する。それは、たとえ人間が地球や自分たちを破壊しても、常に「新しい形と融合しながら」生き続ける自然そのものの姿でもあった。

## 五 おわりに——科学と詩学が会おうところ

ここまで、近代科学の支配的ナラティヴを詩的な原子のナラティヴへ転化しようとするアウイアクタの試みについて述べてきたが、アウイアクタが必ずしも、原子の科学を否定しているのではないということも述べておかねばなるまい。アウイアクタは『永遠なるアラチア』の巻頭で、「私たちが経験できる最も美しいものは神秘である。神秘は真の芸術と真の科学の根源にある基本的な感情である。

それを知らず、もはや驚きをもつこともできないものは、死んだも同然で、火の消えたロウソクである」というアインシュタインの言葉を引用し、また『セイルー』の中では、ニールス・ボーアの「原子」ということになる、言葉は詩の中だけか語られない。詩人も、事実を語ると言うよりは、イメージや精神的つながりを創造することに関わっているのだから」という言葉を引用した<sup>(27)</sup>。この事実は、アウイアクタの原子の詩学が、アインシュタインやボーアといった理論物理学者たちが提唱してきた詩的な科学と、基本的には同じ立場にあることを示唆している。アインシュタインが芸術と科学の根源にあるものを「神秘」とし、ボーアが原子を詩の中だけか語れないものとみなしたように、アウイアクタもまた、原子をミステリアスで詩的なものとして捉えていた。

原子は私の幼少時代の詩—イメージやリズム。それはミステリアスで危険な美の存在。…まるで山のように。私は原子も山もどちらも愛した。それから原子はおかしくなる…見知らぬものへと変わっていった。なぜかは分からないけれど、私は原子を避けてしまった。でも今では分かる。問題なのは、どういう風にそれが語られたのかということ。あの人たちは当時、原子核を分裂させた。きちんと、正確に、うまくコントロールして。それから重たい具体的な散文で描写した。でもその言葉はうまくフィットしなかった。具体的ではだめなのだ。<sup>(28)</sup>

原子は詩であり、イメージであり、リズムである、といった想像力豊かで大胆ともいえるこの発想は、ボーアやアインシュタイン

といった科学者たちの原子のナラティヴと多くを分かち合ってきた。アインシュタインやボーアが、原子の性質は従来理解されてきたよりもずっと適応性があつて予想不可能であるということを見抜き、原子を表現するために新しい言語の用い方が必要であることを提唱していたように、アウイアクタもまた、人間が原子を理解する際には、アナロジーという修辞法が必要不可欠であることを主張してきた<sup>29)</sup>。

だが、皮肉にも、詩的な科学を提唱したアインシュタインの理論やボーアの原子のナラティヴは、肝心の生命の部分を持たない重たい無機質なレトリックや数字に置き換えられ、広島や長崎に投下された原爆開発に貢献する結果となつてしまった。一九四〇年代のオークリッジにおいてもまた、「きちんと、正確に、うまくコントロールして」分裂させる科学や、「重たい具体的な散文で描写」するナラティヴによつて原子は支配されてしまう。そういった意味においても、アウイアクタの提案する原子の詩学に対して、樂觀的にはなることは難しい。しかし、それでも、アウイアクタの詩と散文は、ある種の希望を私たちに与えてくれる。以下は、幼い頃アウイアクタが母親から聞いた言葉である。

それを使つて皆を傷つけることは可能なんだよ、マリルー。それは何万人というヒロシマとナガサキの人々に死をもたらした。けれども原子そのものはどうだろう。原子は人の目には見えないもので、最も小さな粒子。お前の手も、洋服も、お前の飲んでいるミルクも、全てが何百万という原子でできていて、動き回っているんだよ。でも原子が何を意味してい

るかと言うと——。そうだね、まだ誰も分かつていないだろうね。私たちは原子の本来の姿に敬意を示して、原子と調和して生きていくことを学ばなくちゃいけない。<sup>30)</sup>

ここでアウイアクタの母親は、原子が何を意味しているのかということはまだ誰も分かつていない、と指摘する。そしてこの点にこそ、希望が残されているように私には思えてならない。というのも、人間がまだ、原子が何を意味しているのかを分かつてないという事実は、人間が原子をいまだ完全には支配しきれていないということの意味しており、原子が人間によつて支配されない生命体である限り、私たちは語り（生き）続けることができるからだ。私たちの身の回りのできごとについて、自然界の現象について、そして原子について。もちろん、私たちが原子について語るとき、自分たちの経験や境遇といったものから完全に逃れることはできないだろう。私自身も、ウィラード・ストーンの彫刻に出会うまで、原子を破壊的イメージでしか語れなかったように。既存の言語・思想システムを問い直すことは、決して容易なことではない。けれども、原子のナラティヴを問い直し続けるまさにその行為のなかに、人間が原子と新たな関係を築く可能性が、また残されているのかもしれない。

## 注

- 1 Stone, Willard. *Our Atomic Baby*. Glencase Museum, Tulsa. 1946.
- 2 トリアージとは一般的に、戦場などで生存者数を最大限にするために優先順位を決定し、それに基づいて患者の手当や医療処置を行う時などに用いられる概念である。

- 5 Oakridge National Laboratory. Department of Energy. 30 April. 2013. [www.ornl.gov](http://www.ornl.gov). Web.
- 6 Awiaakta, Marliou. *Selu: Seeking the Corn-Mother's Wisdom*. Golden, CO: Fulcrum, 1993. 31. 以下、本稿における英文引用の邦訳は、すべて松永による。
- 7 [Awiaakta] Thompson, Marliou Bonham. *Abiding Appalachia: Where Mountain and Atom Meet*. Memphis, TN: St. Luke's P, 1978. 13.
- 8 *Selu*, 143.
- 9 *Selu*, 30.
- 10 Awiaakta, "Genesis." *Abiding Appalachia*, 47-48.
- 11 The Oakridge Convention and Visitors Bureau. 30 April. 2013. <http://oakridgevisitor.com>.
- 12 *Abiding Appalachia*, 83. Web.
- 13 Visvanathan, Shiv. "From the Annals of the Laboratory State." *Alternatives* XII (1987): 38-59.
- 14 Merchant, Carolyn. *The Death of Nature: Women, Ecology and the Scientific Revolution*. 1980. New York: HarperSanFrancisco. 1983. 164.
- 15 Merchant, 171
- 16 Merchant, 171-72. Louis-Ernest Barrias, La Nature se dévoiant devant la Science. Musée d'Orsay. 1899.
- 17 Merchant, 193, 195.
- 18 Adamson, Joni. *American Indian Literature, Environmental Justice, and Eco-criticism*. Tucson: U of Arizona P, 2001. 170-171.
- 19 Merchant, 211-12.
- 18 Adamson, 171. Visvanathan, 48.
- 19 Visvanathan, 48.
- 20 Marliou, Awiaakta. "Reweaving the Future." Interviewed by Thomas Rain Crowe. *Appalachian Journal: A Regional Studies Review*. Fall 18.1 (1990): 40-54.
- 21 Moony, James. *Myths of the Cherokees*. 1900. Michigan: Scholarly P, 1970. 244-245. 引用は松永が要約したものである。
- 22 Awiaakta, Marliou. *Rising Fawn and the Fire Mystery*. Bell Buckle, TN: Iris, 1983. 17.
- 23 *Rising Fawn*, 43.
- 24 *Selu*, 21.
- 25 *Selu*, 181.
- 26 "Reweaving the Future," 45.
- 27 *Abiding Appalachia*, 11. *Selu*, 68-69.
- 28 *Abiding Appalachia*, 79.
- 29 アウイアクタは「私たちの知覚ではアナロジーによってしか核の世界を経験するにすぎない」と述べている。*Selu*, 69.
- 30 *Selu*, 66.

#### 付記

本稿は九州アメリカ文学会第五十九回シンポジウム「アトミック・エイジのアメリカ文学」と中・四国アメリカ文学会第四十二回大会シンポジウム「カウンターナラティブから読むアメリカ文学」で発表した内容に、加筆・修正を施したものである。また JSPS 科研費(科研番号: 25770111) の助成を受けた研究の一部である。